The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	台湾省における現代の或る葬礼の記録
Author(s)	
Citation	中国研究集刊. 1994, 15, p. 104-106
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61014
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

台湾省における現代の或る葬礼の記録

このビデオは、台湾省屏東県において行なわれた葬式当日の全記録を短縮して編集したものである。

この葬儀記録「邱府絹太夫人告別式」は、あくまでも一例であって、現在の台湾省において、すべて同一というわけではない。しかし、『儀礼』以下諸文献に示されている儒教式喪礼の伝統（特に『朱子家礼』以来の標準的喪礼）が、省略や変形を加えながらも今に伝わっていることをよく示している点で、参考になる。ただし、純粋の儒教式喪礼ではなくて、道教・仏教の影響が濃く、儒・道・仏の混合である。現実に一般に行なわれている葬式は、このようである。

以下ビデオの大略を紹介する。

邱家の太夫人（大奥様）の翁絹さんは、中華民国十一年（一九二二年）十月二日に生まれ、民国七十八年（一九八九年）に逝去した。享年六十八。杖期人（喪主）は夫の邱淇淋氏。喪に服する親族は、息子四人、息子の嫁三人、娘三人、娘婿一人、内孫の男六人・女一人、外孫の女二人である。

告別式は五月二十二日十一時に始まった。霊堂（柩の安置場所）は自宅前の広場。四方には親しい友人から贈られた輓聯（哀悼用の対聯）が張り巡らされている。式は、儀礼・音楽ともに道教と仏教とが入り交じっている。もっとも、ふつうの葬式では、白色の喪服ならびに下に着る白色の衣服が一般的なのであるが、この葬式では、遺族の男子は黒色の衣服を下に着ている。これは特殊であり、欧米流の黒色の喪服の影響を受けたものと思われる。

道士の唢納（チャルメラのような楽器）に先導されて、柩は葬儀業者の手で室内から霊堂の正面に据えられ、花で覆われ、邱家の親族は、それぞれ一定の規定による喪服を着る。そして、悲しみで立っていることができない気持の表現を形式化して、家から這って出る。ただし、喪主である夫は、妻が先に亡くなったの

で、平服のままで這わずに家を出る。

式場では僧侶の演奏する仏式の音楽が流れる。葬式の進行役が「邱家の太夫人のお葬式を始めます。奏－哀－楽」と言うと、息子達が柩近くの所定の席につく。親戚の者が柩に釘を打つ仕草をする。その間、家族は柩のまわりに座り、それを見守る。四人の息子は進行役の合図によって席を立ち、長男の長子（嫡孫）を加えた五人が、喪服の下に黒い衣服を着て（ふつう白いものを着る）、進行役の指示によって以下のような儀式を行う。儀式の間、嗩納を伴った道教の音楽が流れる。

跪く。拝する。立つ。献花する。拝する。酒を地上（形式上は器の中）に注ぐ。三度拝する。立つ。三度拝する……。元の席に戻る。

息子の儀式が終わった後、嫁・娘・内孫・外孫の順で同様の儀式を行う。

以上、直系の親族の次に礼拝するのは、邱家の甥・甥の嫁である。その後が娘婿（白い喪服を着、白い帽子を被っている）となり、その後が故人・絹さんの実家の人達となる。

上記の儀式が終了した後、故人の実家の兄弟が席を立って、悲しみのため起つことができず、うずくまっている息子・娘を助け起こす。その後、長男が代表して、故人の生前の遺徳を称えた弔辞を読む。弔辞の最後ではもう孝を尽くせないという意味で息子である聯恭さんが「不孝男聯恭」（不孝な息子である聯恭）と自称している。

弔辞を読み終えると、喪主は、自らは述べず、隣に立つ友人に代弁してもらい、参列者に謝辞を述べ、最後に友人達から拈香(焼香)してもらう。家族は道士たちに先導されて柩のまわりを三度回り、式場を出る。

遺族は霊柩車の後を徒歩で付き従い墓場へ向かう。町外れの或る地点で、遺族は跪いて参列した友人たちにお礼を述べて彼らと別れる。

埋葬の際には、方位磁針を用いて風水（柩を置くのに縁起の良い方角を定める）の儀式を行なう。赤い服の道士と白い服の僧侶とが入り交じって演奏する中、柩が埋葬される。遺族はその間、線香を立てて祈る。

墓はこの後、レンガとコンクリートとで固められる。その作業中、遺族は釘（子孫繁栄を意味する「添丁」の丁と釘とは音が通ずる）を撒く。そして道士に先導されて墓の周囲を回る。（ちなみに、十年程経つと墓から遺骨を取り出し、墓のそばにある家廟に祭ることになる。）

埋葬の諸儀式が終ると、遺族は或るところから車に乗り、家へ帰る。家の前で喪服を燃やす。

この葬式の場合、死者が亡くなった五月一日から五月二十二日当日までを服喪の期間とし、家族は喪服を着、肉を食べず、髭を剃らず、髪も切らない等の簡素な生活を送っていた。葬式が終った後に通常の生活に戻る。なお、葬式の日取りは、死者の生年月日・時刻に基づいて決定する。